

木下南城遺跡

~~緊急発掘調査報告書~~

昭和51年度

箕輪町教育委員会

木下南城遺跡

昭和51年度

箕輪町教育委員会

序 文

南城は隣地に位する北城と並んで、中世の箕輪城址と関連して名付けられたように思われる。しかし南城遺跡は単に中世に止まらず遠く縄文・弥生期等も加わった複合遺跡と推定されていた。

というのは、大正中期に行なわれた西天竜開田工事の際、この遺跡からほぼ完形に近い把手付のみごとな甕が発掘されたり、土器片が夥しく存在したという事実があるからである。

しかし、開田に際して相当に荒らされていて、果して遺構の確認が可能であるか多分に疑問という見方もある。

今回町の51年事業として、住民要請を受けて墓地公園を造成することになったので、町に要請して緊急発掘を実施することになったのである。

そして調査団を編成し、団長日本考古学協会員友野良一先生の指揮の下に、小川守人、柴登巳夫、市川脩三、荻原茂、小池幸夫氏等の団員の手により発掘が行なわれこの報告書が作成されたわけである。

なお特筆すべきは発掘に当って発掘日誌等に見られるとおり、箕輪町郷土博物館郷土史クラブの小中学生の豆考古学者諸君が多数参加して発掘を手伝ってくれたことで、この発掘従事の感激は感想文として博物館に残された。

最後に、調査団の先生方と発掘を手伝って下さった諸君に深甚なる感謝を捧げて序言とします。

昭和52年1月22日

箕輪町教育長 河 手 貞 則

凡　　例

1. この調査は箕輪町開発公社の行なう事業前に終了する計画のため緊急の記録保存事業とした。
2. 報告書は、図版を主体として文章記述は簡略とした。
3. 本報告書の執筆および図版作製は次の通りである。

・本文執筆者

友野良一 柴 登巳夫 藤森洋子 萩原 茂 小池幸夫

・図版製作者

柴 登巳夫 萩原 茂 小池幸夫 藤森洋子

・写 真 摄 影

柴 登巳夫 萩原 茂 小池幸夫

4. 調査協力

箕輪町郷土博物館郷土史クラブ

5. 本報告書の編集は主として、箕輪町教育委員会があった。

目 次

序 文

凡 例

目 次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 環 境	1
第1節 位 置.....	1
第2節 遺跡の自然環境.....	2
第3節 歴史的環境.....	3
第Ⅱ章 発掘調査の経過	5
第1節 発掘調査に至るまで.....	5
第2節 発掘日誌.....	6
第Ⅲ章 遺 構	8
第1節 塚状遺構.....	9
第2節 火葬墓.....	10
第Ⅳ章 遺 物	11
第1節 土 器.....	11
第2節 石 器.....	12
第3節 その他の遺物.....	13
第Ⅴ章 所 見	14
附 南城遺跡発掘調査に参加した 博物館郷土史クラブ員の感想文	

挿図目次

第1図 位置図.....	1
第2図 地形.....	2
第3図 遺跡分布図.....	4
第4図 遺構全測図.....	8
第5図 堀状遺構実測図.....	9
第6図 火葬墓実測図.....	10
第7図 堀状遺構地層断面図.....	10
第8図 繩文式土器実測図.....	11
第9図 繩文土器拓影.....	11
第10図 陶器実測図.....	12
第11図 石器実測図.....	12
第12図 土器拓影.....	13

図版目次

第1図版 椰柵地区全景
第2図版 遺構
第3図版 遺物出土状況

第I章 環 境

第I節 位 置

木下南城遺跡は上伊那郡箕輪町大字中箕輪13373-1及び13373-3番地に所在する。国鉄飯田線木下駅を下車して、西の方向に木下の市街地を抜け、国道153号線を横断して駅から約600mの東向きの段丘上にある。

標高は、おおよそ700mで眼下を流れる天竜川との比高は約35mを計る。



第1図 位置図

第2節 遺跡の自然環境

箕輪町を立体模型図に作って見るならば東西の端が一番高く中央が低い、V字形と見ることがで
きよう。町の中央を南北に流れる天竜川は、町を東西に二分し、広大な氾濫原と河岸段丘を形成し
ている。

遺跡周辺の地形は扇状地と河岸段丘である。伊那谷のうちでも最も平らで広い部類に入る天竜川
西岸の扇状地は、経ヶ岳、黒沢山を源として流れる大泉川、帶無川によって形成された扇状地である。

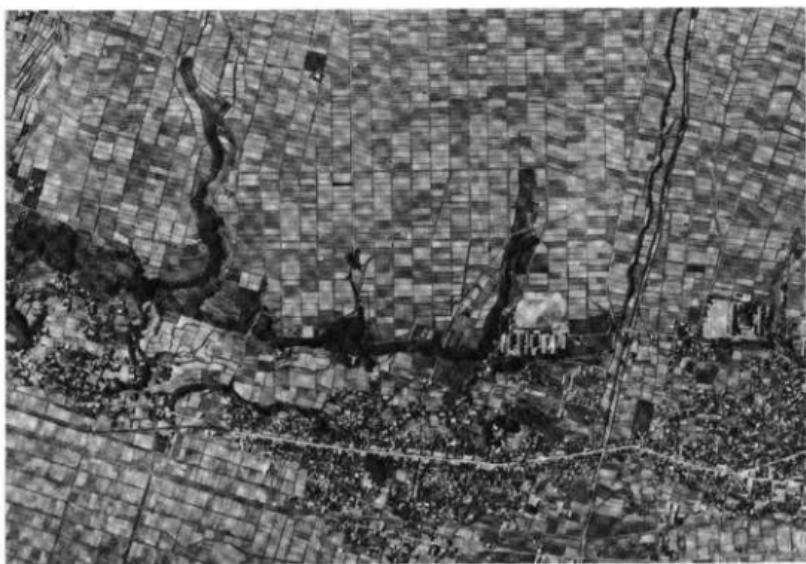
遺跡はこの扇状地突端に位置している。遺跡に立って東方を見ると段丘下に天竜川とその氾濫原、
それに続く中小河川によってできた斜面の急な小扇状地が押し合うように形成されている。これに
対して天竜川西側は傾斜度の緩やかな平坦地が経ヶ岳山塊の山麓まで数キロの間続いている。

遺跡の位置する段丘崖下には豊富な湧水が出ている。

この段丘下の湧水列は、今日でも水道水として使用しており、数千年にわたりここに住んだ人には
とっては欠くことのできない重要な水源であったのである。南城遺跡に生活した人々もこの湧水を
利用したことは当然である。又西側に続く平らな地一帯は、動植物の生成、生息地であり、段丘下
に開ける広大な氾濫原の肥沃な低湿地帯は、稲作には絶好の生産の場であったにちがいない。

箕輪町にはこの南城とほとんど同じような自然環境をそなえた遺跡が天竜川と平行するように南北に
列状に並んでいる。

(柴 登巳夫)



第2図 地 形

第3節 歴史的環境

南城遺跡を囲む歴史的環境は実に豊富なものがある。箕輪町は河岸段丘と数多い扇状地によって形成された地形から古代人にとって好的な居住地であったにちがいない。

そのため町内には先史より近世に至る歴史上の遺跡に富み、その総数は150カ所を越し、上伊那郡内における屈指の遺跡地帯といわれている。

その中においても天竜川西側の段丘尖端部に切れ目なく南北に列状をなして並ぶ遺跡群がある。南城遺跡はこの中の一つである。遺跡の南側には昭和49年5月に分譲宅地開発事業の造成工事に伴って緊急発掘調査がなされ、弥生時代の住居址等の遺構が検出されていた猿樂遺跡がある。猿樂遺跡を境に南箕輪村の遺跡群が存在している。それ等は南垣外、丸山、天王森、上人塚、垣外、天伯などの遺跡が並び、なかでも天伯遺跡は昭和42年の土地改良工事に伴う緊急発掘調査によって、繩文時代中期から平安時代に至るまでの大複合遺跡であることが確認された。天伯遺跡に統いて、向垣外、西垣外、北垣外などの遺跡を経て、その南には昭和33年の発掘調査によって、ローム層内から発見された槍先型尖頭器をはじめとする50余点の石器類が出土した神子柴遺跡がある。北に目を転すれば、南城遺跡と洞一つ隔てて北接するのが北城遺跡（2）がある。段丘上遺跡列中最大の規模を持っていると思われる。昭和46年、長野県企業局の分譲住宅団地造成事業に伴い緊急発掘調査され、繩文後期から平安時代にまで至る複合遺跡であることが判明した。この発掘調査において弥生時代後期及び平安時代の大集落の一部とみられる23戸の竪穴住居址と20基余の火葬墓群が検出された注目される遺跡である。

もう一つの洞を越えると県立箕輪工業高等学校のある上の林遺跡に至る。この遺跡は繩文中期の遺物を多量に出土する地で同校建設の際、又、校庭拡張工事等によって何カ所かの住居址も発見されている。このように段丘尖端部には遺跡が続き、帶無川を過ぎると藤山（4）、中山（5）などの遺跡が並び、天竜川と支流深沢川の合流点に接した段丘上に、全長60m、後円部直径30m、高さ10.6m、前方部の幅46m、高さ11.5mの規模を有する上伊那地方唯一の前方後円墳、松島王墓（8）がある。前方部が後円部よりやや高く、中央のくびれ部の左右に丸い造り出しが附けられており、この点眼下で唯一の車塚形式の古墳として知られている。周囲に塚をめぐらし、東北のやや離れた地点に一基の陪塚を伴っているが、以前においては、他にも陪塚が存在したといわれている。

遺跡に立って段丘下に目をやると、天竜川氾濫原上に在る代表的遺跡としては、箕輪遺跡を上げなければならない。南城遺跡の東方下にあり、飯田線木下駅東方及び東南方の久保下、苦谷、馬場、御室田、鐵治屋垣外及び、大清水などの地籍から南箕輪村塙ノ井地籍までの広範囲に及ぶ大遺跡である。昭和27年から施工された土地改良工事によって、当該地籍から繩文後期から弥生時代中・後期及び平安時代にまで至る多量の遺物が出土した。なかでも注目されたのは、舟、木製櫓、田下駄、木製人形、木製農耕具、木器類、更には延長4000m余、数量にして数万本に達するといわれた木杭の多量出土であった。残念なことに、学術的発掘調査がまだ行なわれていないが、古代水田址の存在を証拠づける遺跡であり、段丘上にある遺跡群、特に王墓をはじめとする古墳群との関係等、今後の研究調査に大きな期待の持たれる遺跡である。

南城遺跡をとりまく古代の遺跡の概要は以上である。



第3図 遺跡分布図

- | | | | |
|---------|-----------|-----------|---------|
| ① 南 城 | ② 北 城 | ③ 上 中 田 | ④ 藤 王 |
| ⑤ 中 山 | ⑥ 堂 地 | ⑦ 林 道 | ⑧ 射 |
| ⑨ 箕輪 遺跡 | ⑩ 澄 心 寺 下 | ⑪ 煙 出 | ⑫ 御 猿 |
| ⑬ 本 城 | ⑭ 高 室 古 墳 | ⑮ 大 田 中 上 | ⑯ 山 墓 山 |

第II章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

昭和51年度事業として、住民要請を受けて墓地公園の造成をすることになった。この南城は隣りの北城と並んで中世の箕輪城址と関連して名付けられたものであろう。この地一帯は大正中期に行なわれた西天竜開田工事の際、いくつかの住居址をはじめとして、縄文、弥生、平安時代に至る多量の遺物が出土したことが伝えられている。その中においても完形に近い何点かが確認され現在残っているものもある。このようなことから墓地公園の造成前に発掘調査を行ない一部だけでも記録に残して保存する必要があるので、町に要請して緊急発掘を実施することになったのである。

日本考古学协会会员の友野良一氏を調査団長とする調査団を組織し、3月19日から記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施する運びとなったのである。なお今回の調査は小・中学生が多数参加され、実際に発掘作業を行なったことの意義は大なるものがあった。

イ) 調査面積

600 m²

ロ) 調査日程

発掘調査 8日間

ハ) 調査団

団長	友野 良一	日本考古学协会会员
調査員	小川 守人	箕輪町文化財調査員
〃	市川 勝三	〃
〃	柴 登巳夫	箕輪町郷土博物館主任
〃	荻原 茂	東京薬科大学学生
〃	小池 幸夫	静岡大学学生

ニ) 調査協力

箕輪町郷土博物館郷土史クラブ

ホ) 事務局

河手 貞則	箕輪町教育委員会教育長
唐沢 保美	〃 教育課長
唐沢 千洋	〃 社会教育主事
中村 文好	〃 主事
柴 登巳夫	箕輪町郷土博物館主任
藤森 洋子	〃 学芸員

第2節 発掘日誌

3月19日(金) 晴

調査予定地区にブルトーザーを入れ、表土の排土作業を行なう。同時に付近の表面採集を行なったところ、打製石斧一点と、数多くの土器片・陶器片を採集した。採集した土器片・陶器片は繩文式土器（中期）弥生式土器（後期）土師式土器、また須恵器、灰釉陶器と各時代に渡っており、さまざまな時代の遺構の存在が予想された。

3月21日(日) 晴

午前10時、調査員や郷土クラブ員が箕輪町郷土博物館に集合し、手わけをして道具などを現地に運ぶ。10時30分より現地にて結団式。友野調査団長、柴調査主任より発掘調査にあたって



の説明や注意がある。結団式後、調査予定地区を東西に東からA B C…、また南北に南から56・57・58…と2mごとに付し、グリットを設定し杭打ちを行なう。調査予定地区西側は耕作等による破壊がひどいため、東側を重点的に調査することにする。56・58グリットを1つおきに発掘していくと、A56・C58・E56・G56・I56グリットよりビットが検出されたが、形も深さも一定でなく、配列にも規則性は認められず、何かの遺構というより農耕等によるものと考えられる。A58グリット東側より集石が検出され、集石付近からは多くの炭化物やわずかではあるが人骨が発見された。まだ北側に統くと思われる所以A59・A60グリットを拡張すると、グリット中央から東に向かって落ち込む落ち込みが発見された。壠状の遺構ではないかと思われる。本日の調査では住居址らしい落ち込みは検出されなかったが、各グリットからは土器片、陶器片が出土した。

3月22日(月) 晴時々曇

今朝はたいへん冷え込み、昨日調査した所に霜柱が立ってしまい今日の作業は霜柱を排除する事から始まる。昨日検出されたA59・A60グリットの壠状遺構のプランを確認するために、A61・B58~61グリットを調査する。壠状遺構内からは灰釉などの陶器片が出土した。また壠状遺構のセク

ションを取るため、A61・B61グリット内に50cm幅のベルトを残して調査を進めた。夕方B22グリットより落ち込みが検出されたが、これが住居址となるのか、あるいは堀状遺構となるのか、明日の調査に期待して、本日の調査を終了した。

3月23日(火) 曇のち雪

昨日検出されたB63グリットの落ち込みを確認するため、B64・C63・C64グリットを拡張するとともに、堀状遺構の



確認をするために昨日に続きA57・B58グリットを拡張する。9時30分頃より雪が激しくなったので10時で作業を中止し、10時30分からは郷土博物館にて学習会を開いた。

3月24日(水) 曇

昨日と同様に本日も霜柱が立ってしまい作業は難航する。堀状遺構のプラン確認とB63グリットに検出された落ち込みのプラン確認に力を入れる。本日の調査でB63グリットの落ち込みは堀状遺構へ続くものとわかり、この堀状遺構がかなり長く南北に連がっていることが確認されたので堀状遺構を掘り下げ始めた。堀状遺構内からは、弥生式土器や陶器類が出土した。

3月25日(木) 晴

堀状遺構は火葬墓と思われる集石の下を通り、南にまだ続くと思われる所以、本日は火葬墓の清掃、



写真撮影、実測を行ないA62・B62グリットの掘り下げを始める。集石付近から一片の陶器片が出土し、これが時代決定のカギになると思われる。またA62・B62に残した50cmベルトにより堀状遺構の地層断面の実測を行ない、直ちにベルトをはずし掘り下げた。堀状遺構底部付近からは弥生式土器の出土が割合が多く、壁や底部はかなり堅くなっているようである。

3月26日(金) 晴のち曇

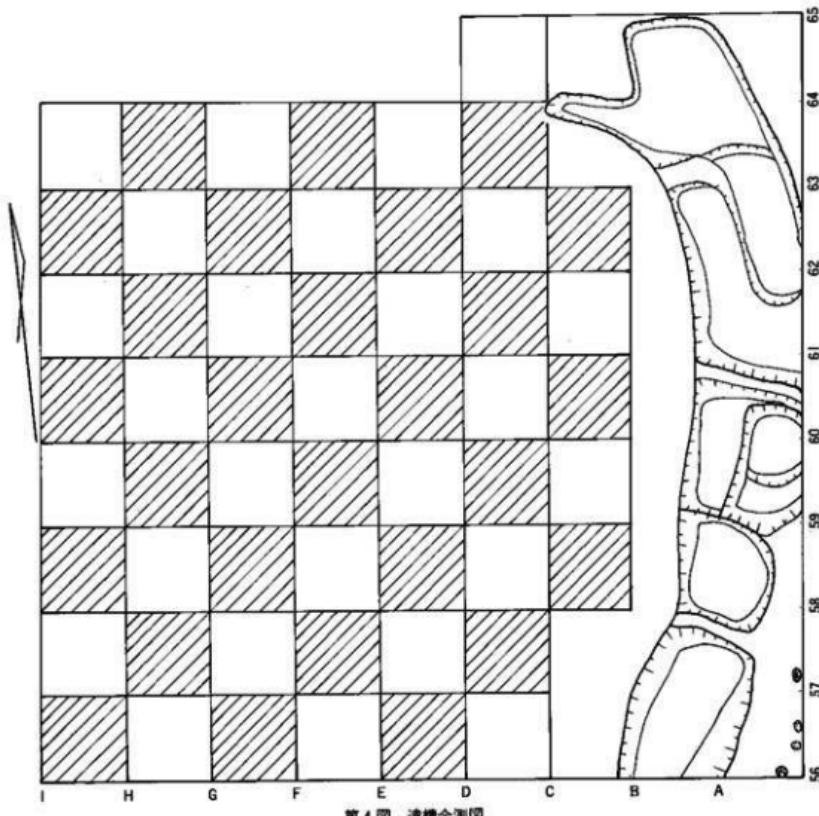
昨日に続き堀状遺跡の掘り下げを行ない、堀状遺構の全体を明らかにした。しかし、堀状遺構東半分は発掘予定地区外のため、西半分で全体を考えなければならない。堀状遺構は南へ行くほど西側に曲がり、A61グリット付近では二段遺構、またA56・57、B63グリット付近では単なる土塁のような構造を持っていることがわかった。各グリット、堀状遺構の清掃を行ない、全体の写真撮影、全体測量を行なって本日の作業を終了した。

3月27日(土) 雨のち曇

堀状遺構の測量を行ない、全作業を終了した。

(荻原 茂)

第III章 遺構

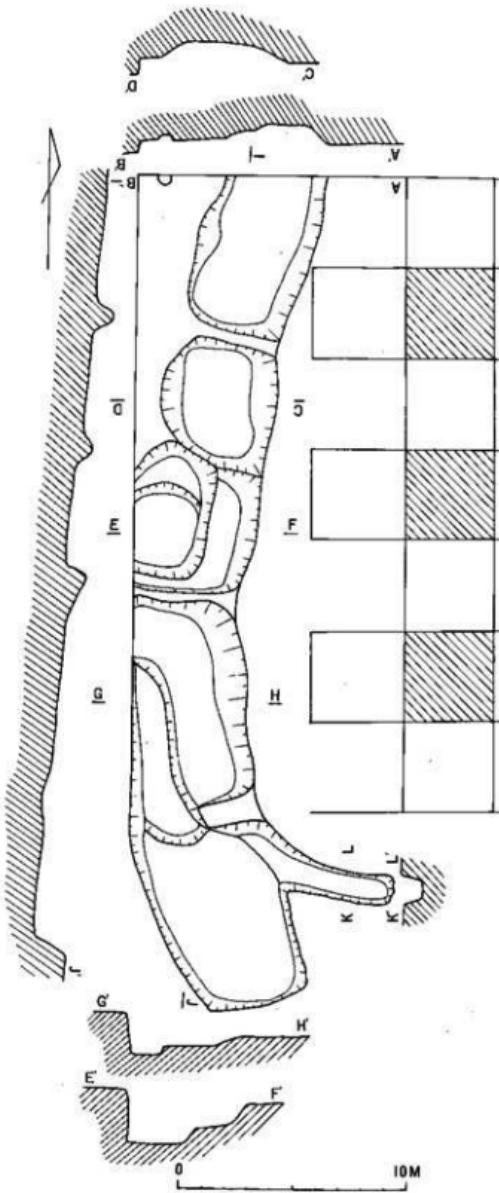


第4図 遺構全測図

第一節 堀状造構

発掘調査区東寄りのA列、B列を中心に発見された遺構である。遺構は南北に長く続いており巾約2m、調査された部分での長さ18m余であった。遺構の西側の壁の状態はほぼ原形を観察することができた。それによると第5図のE-F、G-H断面に見るごとく、二段構築になっており、いずれの面もある程度のかたさをもっている。又、遺構を区切るようにところどころに橋状に盛上った部分がある。遺構東側の壁の立上り状況は地形上掘ることが困難であり明らかにすることことができなかつことは残念であった。この遺構の性格であるが、出土遺物は、繩文土器片、石器、弥生土器片から須恵、灰釉陶器片と各時代のものが混入し、その出土の状態も規則性はなく時代的前後関係を観察することはできなかつた。このような状況からみて、この遺構が作られたのは中世以後と考えたい。そしてまわりの土に混入した各時代の遺物が土と共に流れ込んだものであろう。これ等のことから判断して本遺跡の東に位置する中世の館址、「箕輪城」の堀の一部ではないかと推測した。

(柴 登巳夫)

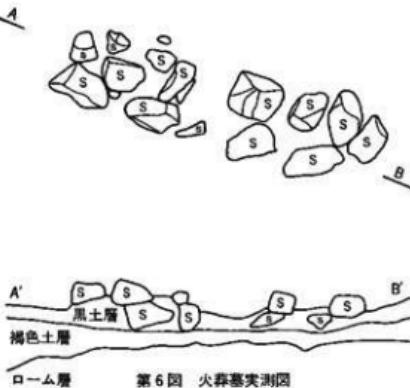


第5図 堀状造構実測図

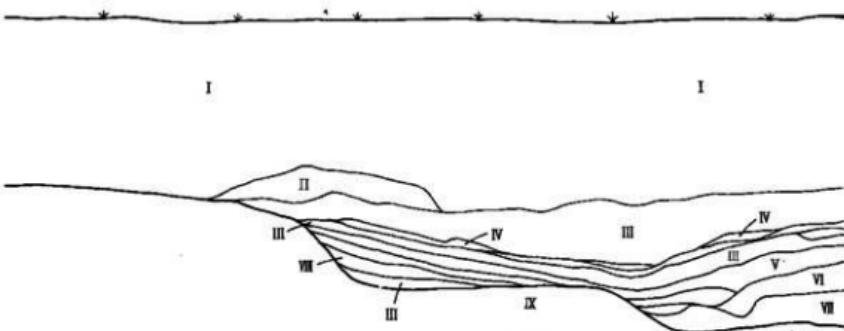
第2節 火葬墓（第6図）

壠状造構の調査中に58-Aグリット中に集石炭、骨片が発見される。この遺構は壠状造構の東壁面上に位置している。プランは南北1m、東西40cmの長方形で、中に拳大から頑丈の石約20箇よりなる配石施設である。この配石に混入して炭と、骨片が出土した。この状況の類例は、本遺跡の北に先年発掘調査された、北城遺跡にそれを見ることができる。北城遺跡においては壠の斜面を利用して火葬墓が20基以上発見されている。本遺跡の場合においても壠状造構を利用しての火葬墓という点では共通するが、構造において少し異なっている。北城遺跡の場合はローム層を「T字状」に掘り込んでその底部に配石をしてあるが、本遺跡の場合は掘込んで穴状にした感じはない。又、焼け方も弱く、炭化物及び骨片も少くない。それ等の点においては北城遺跡の場合と異なるが、中世以後における火葬墓と判断する。

（柴 登巳夫）



第6図 火葬墓実測図



第7図 壠状造構地層断面図

壠状造構層序説明

第I層	耕作土層
第II層	黒褐色土層 やや褐色氣味の黒土層。
第III層	褐色土層
第IV層	黒土層
第V層	褐色土にロームブロックが混入している。
第VI層	黒土にロームブロックが混入している。
第VII層	Vよりやや黒味が加っている。
第VIII層	ローム混入層
第IX層	ローム層 (黄褐色)

第Ⅳ章 遺 物

第1節 土 器

イ) 繩文式土器 (第8図、9図)

縄文時代の土器で実測できたもの

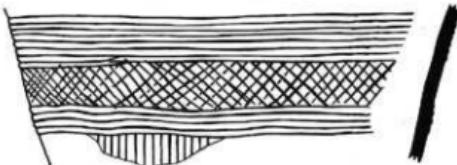
は第8図に示したものだけである。

円筒状の深鉢型土器の胴部である。

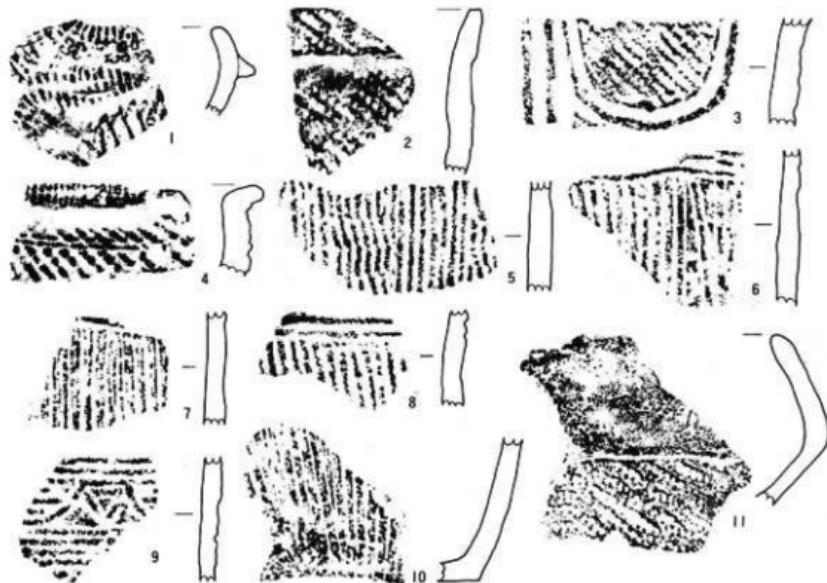
最大径は19cmを計り、半裁竹管を使って6本の隆体を横位に並べている。その下側に沈線で直線を斜めに交叉させて菱形を作っている。半裁竹管の直径は3mmである。

器面は茶褐色を呈し、胎土中に雲母の石英を含み焼成は良好でしっかりした感じを受ける。土器製作時の巻き上げをした粘土紐の状態に添ってこわれているのが目につく。時期は縄文時代中期初頭である。

第9図に示した拓影土器のうち1.は前期諸礎式土器であり他は中期初頭及び中期中葉の土器である。前期の土器は細い粘土紐を張り付けている。中期初頭の土器は半裁竹管で文様をつけている。胎土中には雲母と石英を含み焼成は良好である。



第8図 縄文式土器実測図



第9図 縄文土器拓影

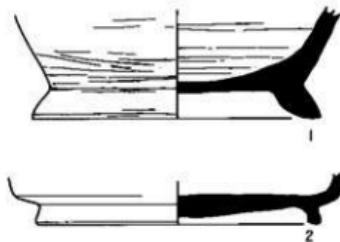
四) 灰釉陶器 (第10図)

第10図-1は壠状遺構の中より出土したもので、灰釉瓶の底部と思う。巾の広い高台をつけ、ロクロによる製作である。胎土はきわめて密であり、焼成も良好で、色調は灰白色を呈し釉の部分は青色又は薄空色をしている。ロクロの回転方向は右廻り（時計回転）である。

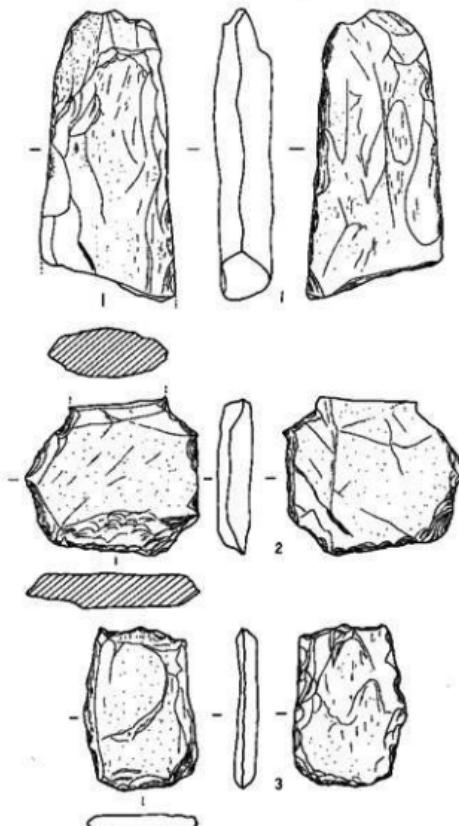
2-1は表面採集資料で、高台をつけた环の底部である。この高台は付け高台で、やはりロクロの回転は右廻りである。底部からの立上りが急になっており、9世紀の折戸窯式に類似する。

第2節 石 器 (第11図)

本遺跡出土の石器は3点である。(第11-図-1)は表面採集であり、撥形をした打製石斧で刃部が欠損している。両縁辺から打ち欠いて調整し形を作っている。図の2は壠状遺構内より出土したもので、母石の側縁を利用して作成したものである。刃部は使用による磨滅痕があり、かなりの使用があったことを物語る。脛部から上半分は欠損している。硬砂岩製の打製石斧である。図-3は56-Cグリットよりの出土であるが小さな打製石斧である。これも両側縁から打ち欠き形を整えている。やはり上部半分は欠損している。粘板岩である。



第10図 陶器実測図



第11図 石器実測図

第3節 その他の遺物

出土遺物中最も多いものは縄文時代中期初頭の土器片であった。灰釉陶器については前述（第10図）のような資料が出土している。その他に少量ながら、第12図に示すような弥生式土器や須恵器も一部出土した。第12図の1.は弥生式土器の壺の肩部の破片であるが、10本ほどの櫛状工具で引いた直線と約半回転の扇形文を施している。この土器は恒川式に類似する櫛目文を多様する中期末のものと考える。2、3は須恵器大型壺の胴部破片である。表裏に成形時につけた叩き目が残っている。この叩きの手法は一般に器壁の胎土を叩きしめ、気泡を追いだすためにおこなったといわれているが、同時に器壁を叩きのばしてかたちをととのえたり、厚みを平均化することも同時に行なわれていたと考える。その他ごくわずかの土師器（内黒の壺類）や中世陶器も出土した。



第12図 土器拓影

第V章 所 見

南城遺跡の緊急発掘は面積600m²の広さを調査した。その結果の詳細は、前述の通りであるが、調査を通じて得られた所見の2、3について記してみたい。

1. 本遺跡の占めている地理的条件は、縄文時代・弥生時代・奈良・平安時代から中世・近世そして、現代に至るまで各期が必要とする生活の諸条件を十分に具備していたことを物語っていると思う。今後、これらの条件の類別研究は、同じ条件下に存在する天竜川沿岸類似遺跡の研究の一指標となろう。

2. 縄文時代の南城遺跡

今回の調査では、縄文時代に關係のあると考えられる遺構は検出されなかつたので、出土した遺物についてみると縄文前期末の諸磯式に比定されると考えられる土器の口縁部1片。他は縄文中期初頭形式、中期中葉、中期後葉の土器片が検出されたことから、今回の調査地区以外に縄文時代の集落が存在するものと予想される。

3. 弥生時代の南城遺跡

今回の調査では、弥生時代の遺構はついに発見されなかつたので、出土した若干の土器についてみると弥生時代後期前半に比定される短線文と波状文が施文された變形土器の頸部破片と無文の胴部で他には弥生式の遺物は検出されなかつた。おそらく弥生時代の集落は北城遺跡に集中したものと考えられる。

4. 平安時代の南城遺跡

北城遺跡からは、平安時代の住居址が7軒も発見されたが、本遺跡からは一軒も発見されなかつた。このことは、弥生時代と同様北城遺跡に集落が集中し、南城地域はその外周であったようである。今回は出土した若干の遺物についてみてみたいと思う。須恵器は陶邑第V期に類例を見る荒い叩き目文のある變形の破片。灰釉陶器は、K-90後半胎土は黒色、釉調は透明ガラス質の系統の猿投窓のものと胎土が白色、釉はコバルトの東濃系O-53期の二系統のものが認められる。時期的には9世紀後半と11世紀前半の二時期に存在したことが考えられる。

5. 中世の南城遺跡

南城は天竜の氾濫原の段丘上に設けられた平山城である。この城は主郭を中心として北に北城西に西郭、南に南郭など梯郭式城郭と考えられる。主郭の面積は、6,700m²、四方に土塁をめぐらす。この土塁は、内側が2.5~3.0mと高く南と北は東に行く程低くなっている。

東の土塁は、高さが50~70cmと低くわずかにその面影をとどめているにすぎない。こうした、土塁型式は伊那谷では、伊那市小黒城、表木城、下牧城、諏訪形安岡城等があるが、おそらく時代や権力の背景に類似性をもっているものかも知れない。今後城郭研究の大きな課題である。

主郭の南は養秦寺の南の堂に通じている空堀で、南の郭と境をなしている。北城（北郭）は主郭、西、南の郭と合せて一連の城郭であることには、堀口貞幸氏が北城の報告書で述べている通りである。この北城址では、弥生時代・平安時代の集落は特に注目されたが、中世城郭構造に關

係する漆塗の調査には余り研究がなされず、中世末頃の火葬墓に目が向けられ、漆塗の性格を明らかにされなかったのは、中世城郭の研究上おしむべきことであった。西郭は北城（北郭）に発見されたと同様居館の掘が発見された。この掘は主郭の西の堀の西側に発見されたもので、南側の基点は明らかでなかったが、南北に設けられた小堀で、おそらく、内側に小上屋を作った小規模のもので、中世中頃の城館址の外郭によく見受けられる例である。おそらく西郭は城に関係した郎党・郎従の住居地ではなかったか。この小堀は北城の堀が利用されたと同じ火葬墓として使われたものであろう。

今回の調査は、南城の西郭の一部を調査した結果のみであるので、南城全体については明らかにすることはできないが、南城は現在養老寺の墓地となっており、城砦は現存しているので、城郭の研究は今後に待ちたい。なお出土遺物中に鎌倉、室町中期の陶片が検出されたことは、木曾の創始者「木曾義昌」の祖流が城主ではないかとの考えもできそうである。また、室町中頃の遺物からは、福与城の支城としての木下氏にも関係がもたらしある。いずれにしろ、南城は、鎌倉から室町頃に比定される中世城郭であることはまちがいないと思われる。

(調査団長 友野良一)

附

南城遺跡発掘調査に参加した 博物館郷土史クラブ員の感想文

○

荻原孝裕

ぼくは、南城遺跡を発掘する前の日、南城遺跡はどんな時代の遺跡か、またどんな遺物がでてくるかなどいろいろ考えた。

次の日、南城遺跡へ行って、発掘をする前に話を聞いて縄文時代から須恵器までの遺物が出てくるとわかり、いっしょにけんめいさがした。すると、鉄の細長くて先の曲がっている変な物が出てきた。何でもいいから初めて出てきたのでうれしかった。何だか聞くと「鉄片」という物で、とても大切だと言つたのでよけいにうれしくなった。まだいろいろ掘っているうちに縄文式、弥生式、土師、須恵器なども出てきた。初めて発掘をやってたくさんの遺物が発掘できてほんとうによかったと思った。

南城遺跡の発掘をやって、発掘の仕方、遺物の取り方や、記録の仕方、縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器などが自分で手に取ってみて、土器の「あつさ」や「かたさ」などが、よく見れてよかったと思った。

そして、いろいろと日本の歴史のうつり変わりや、昔の人の使った物が自分で今、さわってみたと思うといろいろ勉強にもなったし、ほかの人とはちがうことができるよかったです。

また、土器は土からできるなんて思っていなかったので、わかってよかったです。

そして、土器に文様が付いているのはなぜか。また、上薬がかかっているのはなぜかなど思った。

○

千葉由理

私は第一に思うこと。それは、郷土史クラブへ入ってよかったです。発掘の時には、あまり土器が出てこなかつたけれど、いろいろ勉強になりました。

では勉強になったことの第一。それは、土器が出てこなくても出てきても、発掘だということ。私は今まで発掘とは、土器が出てきてこそだと思っていました。第二に発掘の苦労がわかりました。私は6日間のうち4日間だけしか行きませんでしたが、もう家へ帰るとつかれてしまった日が大部分でした。日ごろ何もしていない私が、「発掘をしたからだ」と思いました。第三に、発掘の仕方がわかりました。私はクラブへ入っても発掘の仕方などは、何もわからないありさまでした。まだまだ勉強になったことはたくさんあります。

さて次に発掘の仕方で勉強になったこと。それは、たくさんあります。第一に、グリットという、発掘の仕方を。2m四方を平に掘る掘り方はとってもむずかしいとわかりました。それに、「2m四

方」とばかりしていましたが掘るのはとっても苦労しました。第二に、土器の取り出し方、記録の仕方などです。土器の取り出し方は、今まで、すぐに土器を取り出していいと思っていました。しかしやっぱり物には順序というものがありいろいろなことをやって、土器を取り出すということがわかりました。記録の仕方というものは、今まで何も知りませんでした。そしたら、何ミリかのごばんの目のようなところに書き入れていくのでした。このほかにまだまだいくつあります。

では次に発掘をやって、今までに書いてきたこととちがうこと。まず第一に、幾日か行なっているうちにいやになってしまったこと。原因としては、つかれてしまい、また次の日も行ってつかれてくるのはいやだと思って、行くのがいやになってしまったこと。でも、これだって自分をあまやかせているからだと思いました。

これで私の悟ったことは一応終わりですが、今気がつかなくともまだまだたくさんあると思います。

○

北川高志

ぼくは、南城遺跡を発掘して、一番、感想としてのこっているのは、「疲れた」ということだ。が、一度行きだすとやめられなくなるような魅力を秘めていることも、事実だと思う。「遺物を掘りだしたい」「明日は、どんなものが出てるだろうか」などと思うと、大げさに言えば夜もねむれないほどだった。ぼくは、一日・二日めと出られなかったため、グリットを設定するところは、見ることはできなかつたが、スライドで、そのところを見ることはできた。また、ぼくが行った時は、もう、遺構が出ていて、そのところを集中して掘る段階だった。そのため、ぼくは、最初の日は、人にまけないように仕事をするように、こころがけた。また、発掘中に、火葬場や壙を見る事ができて、勉強になった。しかし、家がでなかつたのは、とても残念だった。

ぼくがこの発掘で学んだことを項目別に分けてみると、

- 一、発掘のしかた
- 二、実物の土器を見ること
- 三、実際に遺構を見ること

の三つだ。予備学習した時よりも、実際の遺構の方がはっきりしていたことには、驚いた。また、計画が綿密だったため、日数がたりないこともなく、とてもうまくいったと思う。このことは、項目の一、三にあたることだと思う。また、今まで土器をひろっても何も気にせずに、ただ縄文式土器だとか、弥生式土器だとか、別に文様も見ずに、あてずっぽうに言っていたような状態だったから、写真で見ても、はっきりわからなかつた。しかし、実物の土器を、あらためて見なおしてみると、「昔の人がよくこんなものができたなあ」と思うこともよくあり、もようを見ていると、やはり長い年月をすぎているんだなあと思うもの（弥生式や縄文式土器）とか、現在でも使えそうなもの（土師器や須恵器）などがあった。このことは、二の項目に入ると思う。

グリットの地区設定からはじまって、水のしみこんだ重い土をはこんだり、休む時には、おやつの包み紙を指さして、「昔の人の紙くずだ」といってふざけたこともあった。また、この発掘をおえて、一種のすがすがしさをおぼえたのも事実だった。この次の発掘からは最初から出て、遺構がで

るまでの発掘の仕方を実際に学んでみたい。

○ 清水良子

この発掘を実施するにあたり、私達クラブ員は、クラブ発足後数回に亘るクラブによっていろいろな知識を身につけた。このクラブは、小学校四年から中学三年までという学年差があり、授業の時は小学生のレベルで行なうという問題もあったのだが、実際発操作業に入るとその様な問題も解消され、授業で受けた知識もかなり自分のものとなった。

私がこの発掘に期待していた事があった。それは、実際の現場でどの様な状態で遺物が発見されるかということである。土器や石器などを自分で見つけ出す、掘り出すということに何か有意義なものがある様な気がしたから。しかし、私の期待を見事に裏切り、私としてあまり大きな遺物を発見することが出来ずじまいであった。しかし、遺物を発見出来なかった代りに、遺構についての事が良くわかった。土の見分けも大部出来る様になり、一つの部分を一人で移植ごとで掘った。少しずつ土をはぎ取ると赤土か、なんだか何か新鮮なものが自分の目の前で次々と現れて来る様にあらわれて、私が、最初思ったあの有意義なものが違った形で現れた様な気がした。

それから、大部クラブのみんなとも仲良しになれた。実際の現場での発操作業の中で、人と人の協力、助け合いなどの心の交流が生まれた様に思う。

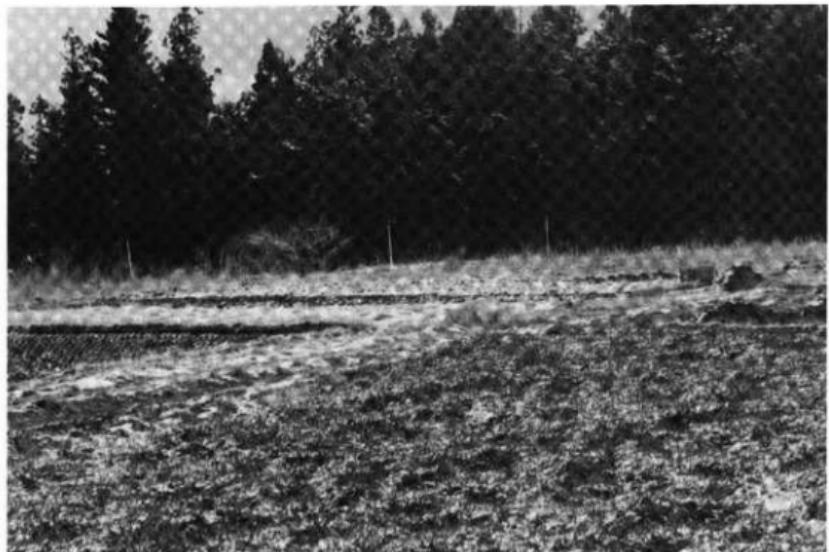
私としては毎日発操作業に参加する事の出来なかった事が残念ではあるが、なんだか、とても楽しく有意義なものとなって私の心に残った様な気がする。

私は、今後このクラブを統けて行きたいと思うが、これからもこれを契機に、箕輪町のいろいろな遺跡の発掘をどんどん実施すれば良いと思う。まだまだ箕輪町には、発掘されずに埋もれているすばらしい遺跡も多いと思うから、この郷土史クラブの手でそれらを全部征服したらすばらしいと思うのだが。

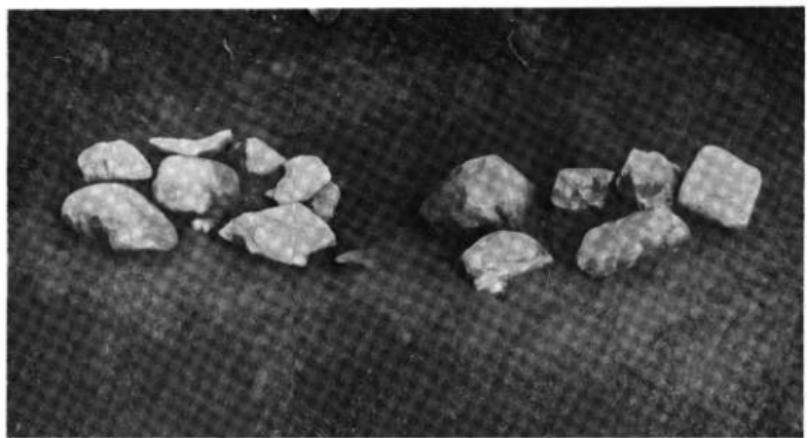
調査協力 箕輪町郷土博物館郷土史クラブ

箕輪中学校	3年	中島元博、浦野友治、那須信則、清水良子、唐沢聰、唐沢竜児、中沢千夏志
	1年	千葉由理、唐沢いづみ、北川高志、新井暢、古屋克芳、布野恵、千葉徳良
		中林久志、中村朋弘、大沼聰、石堂浩幸
中部小学校	6年	飯田裕子、荒川孝枝
	5年	荻原孝裕、向山弘之、中島俊博、牛丸正志、大槻茂、西村比呂志、秋山誠司
	4年	唐沢剛彦、岡賢二
南小学校	6年	笠井陽一、登内盛治
	5年	荻原正教、九田福門、那須俊美
東小学校	5年	三井新一、三井清一、有賀正久、森沢正美、坂下成美
北小学校	5年	有賀毅、井原トミ江、土戸真由美、内田利恵子
西小学校	6年	白鳥賢一、小平浩
	4年	林徹、小平周治、林昭三

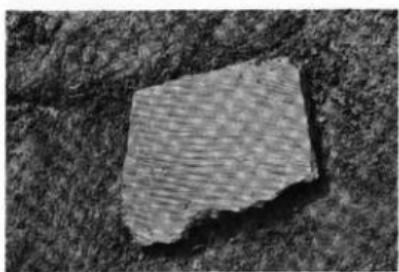
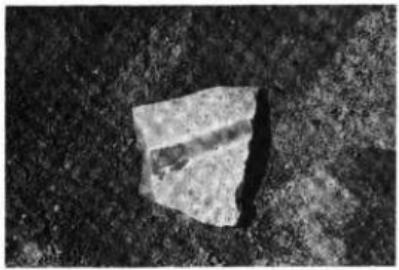
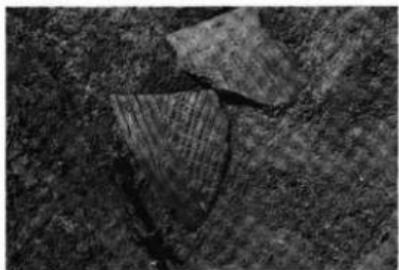
図 版



第1図版 上 調査地区 下 調査地区全景



第2回版 上 火葬墓 下 烟状遺構



第3図版 上 遺物出土状況 下 記念撮影

木下南城遺跡

～緊急発掘調査報告書～

昭和52年3月30日 印 刷

昭和52年3月31日 発 行

発行所 長野県箕輪町教育委員会

印刷所 伊那市 小松純合印刷㈱